

辻 千春 (Chiharu TSUJI)

学位：博士（学術）

略歴：名古屋大学大学院国際開発研究科国際コミュニケーション専攻修士課程修了

名古屋大学大学院国際開発研究科国際コミュニケーション専攻博士後期課程単位取得満期退学

専門分野：視覚文化史、植民地文化、異文化接触論

研究課題：東アジアの視覚文化史

【著書】

〈単著・教科書〉

- ・（入門初級中国語テキスト）『場面で学ぶおもてなし中国語』（あるむ、2021年3月）
- ・上記の補助教材『HSK 単語攻略ワークシート』（あるむ、2023年3月）
- ・『空白の美術史 — 植民地下「朝鮮」で見る創作版画』（中日新聞社、2020年2月）
- ・『戦争と年画 — 「十五年戦争」期の日中両国の視覚的プロパガンダ —』（梓出版社、2000年1月）

〈共著〉

- ・『戦争のある暮らし』乾淑子編（水声社、2008年8月）

〈単著・学術論文〉

- ・「19世紀末日中両国の視覚メディアに見る気球表象—絵師と庶民のはざまで」（名古屋大学中国語中国文学分野・専門『名古屋大学中国語学文学論集』第38輯、p. 29-50、2026年2月）
DOI:10.18999/jouc11.38.29
- ・「日中両国の版画でみる明治日本の表徴の形成と変性」（名古屋大学博物館『名古屋大学博物館報告』vol. 41、p. 25-48、2025年3月）DOI: 10.18999/bulnum.041.04
- ・『『ポストコロナ時代』のオンラインを活用したグローバル教育—科目『e-Tandem Learning 中国語』における授業改善を通して—」（愛知文教大学教職課程研究センター『教育研究』第13号、2023年3月）
- ・『『ポストコロナ時代』の言語教育・異文化交流 — オンライン・タンデム学習のカリキュラム導入実施報告を通して —」（中国語教育学会第20回全国大会準備委員会編『中国語教育学会第20回全国大会予稿集』分科会、2022年6月）
- ・『『中国語ポートフォリオ』+カリキュラム+CC ラウンジ (Chinese Communication Lounge)』— 愛知文教大学中国語教育改革プロジェクト：中国語学修意欲の維持・継続と中国語運用能力養成のための‘能動的教育’の実践例として」（中国語教育学会第16回全国大会準備委員会『中国語教育学会第16回全国大会予稿集』ポスターセッション要旨、2018年6月）
- ・「植民地期朝鮮における創作版画の展開（6）— 朝鮮人美術家による日本の創作版画の修得とその展開について —」（名古屋大学博物館『名古屋大学博物館報告』No. 33、2018年3月）
- ・「植民地期朝鮮における創作版画の展開（5）— 釜山における清永完治と日本人の趣味家ネットワークによる創作版画誌『朱美』の刊行について —」（名古屋大学博物館『名古屋大学博物館報告』No. 32、

2017 年 3 月)

- ・「植民地期朝鮮における創作版画の展開 (4) — 仁川における佐藤米次郎の創作版画活動と時局下の蔵書票展の開催について —」(名古屋大学博物館『名古屋大学博物館報告』No. 32、2017 年 3 月)
- ・「植民地期朝鮮における創作版画の展開 (3) — 京城における『朝鮮創作版画会』解散後の展開と『日本版画』の流入 —」(名古屋大学博物館『名古屋大学博物館報告』No. 31、2016 年 3 月)
- ・「植民地期朝鮮における創作版画の展開 (2) — 京城における日本人の活動と『朝鮮創作版画会』の顛末」(名古屋大学博物館『名古屋大学博物館報告』No. 31、2016 年 3 月)
- ・「植民地期朝鮮における創作版画の展開 —『朝鮮創作版画会』の活動を中心に —」(名古屋大学博物館『名古屋大学博物館報告』No. 30、2015 年 3 月)

【その他】

〈研究発表〉

- ・『『ポストコロナ時代』の言語教育・異文化交流—オンライン・タンデム学習のカリキュラム導入実施報告を通して—」(中国語教育学会第 20 回全国大会分科会発表、於：宮崎大学、2022 年 6 月 5 日)
- ・『『中国語ポートフォリオ』+カリキュラム+CC ラウンジ (Chinese Communication Lounge)」— 愛知文教大学中国語教育改革プロジェクト：中国語学修意欲の維持・継続と中国語運用能力養成のための「能動的教育」の実践例として」(中国語教育学会第 16 回全国大会ポスター発表、於：早稲田大学、2018 年 6 月 3 日)
- ・「空白の美術史、植民地期朝鮮における創作版画の展開についての研究」について」(第 21 回版画史研究会特別講演会講師、於：東京古書会館、2016 年 11 月)

〈社会活動〉

- ・名古屋大学博物館第 37 回企画展「春を迎える — 年画に込められた願いと意図」の展示協力及び指導 (展示期間：2018 年 2 月 6 日～5 月 12 日)
- ・名古屋大学博物館第 37 回企画展講演会講師 (演題「飾り絵に耳を澄ませば！？— 中国年画でたどる庶民の願い —」、2018 年 2 月 17 日)
- ・名古屋大学博物館第 37 回企画展講演会講師 (演題「絵は口ほどにモノを言う！？— 中国年画でたどる政治—」、2018 年 3 月 10 日)
- ・愛知文教大学公開講座第 8 回講師 (演題「中国の正月の飾り絵を見る・聞く？」、2017 年 1 月 19 日)
- ・愛知県小牧警察署国際化問題アドバイザー (2016 年 12 月～)
- ・文部科学省 SPH 事業「コミュニケーション能力向上のための中国語会話指導法の研究委託による名古屋市立商業高等学校における中国語会話指導 (2016 年 5 月～2017 年 2 月)

【研究資金獲得状況】

- ・2019 年度公益財団法人鹿島美術財団「美術に関する出版助成」受領 (対象書籍『空白の美術史—植民地下「朝鮮」で見る創作版画』中日新聞社刊)
- ・2015 – 2017 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (C)「空白の美術史、植民地期朝鮮における創作版画の展開についての研究」(課題番号 15K02181、研究代表者)

- ・1999 年度日本学術振興会：科学研究費補助金「研究成果公開促進費」受領（対象書籍『戦争と年画―「十五年戦争」期の日中両国の視覚的プロパガンダー』梓出版社）

令和 8（2026）年度ティーチングポートフォリオ

氏 名	辻 千春	職位／役職	教授／副学長／グローバル教育センター長
-----	------	-------	---------------------

1. 教育の理念

本学の教育理念に基づき、グローバル化する社会において果敢に生き抜く社会人力を有する学生の育成を念頭においている。すなわち、多文化共生社会において必要不可欠である、異文化に対する理解を深化させるとともに、言語（中国語）の基礎力と応用力の修得を、学生が自立的に実施していくように導くことを教育活動の指針としている。学生が自立的に学修活動を実践していくためには、何のために、何をするのか、について学生自身が理解する必要がある、その理解を促すことに教育活動の重点がある。そして、それが社会人力を有する人材を養成する教育機関が果たすべき使命であると考えている。

2. 教育活動の内容

<2025 年度>

春期：

（学部）

- ・ 入門中国語 B ・ e-Tandem Learning 中国語 A ・ ことばと人文学
- ・ アカデミアゼミ A ・ アカデミアゼミ C

（大学院）

- ・ アジア社会文化研究 1 ・ 研究指導 C

秋期：

（学部）

- ・ 初級中国語 B ・ e-Tandem Learning 中国語 B ・ 語学研修（台湾）
- ・ e-Global Communication ・ アカデミアゼミ B ・ アカデミアゼミ D

（大学院）

- ・ 研究指導 D

<2026 年度>

春期：

- ・ 入門中国語 B ・ ことばと人文学
- ・ アカデミアゼミ C

3. 教育の方法

（1）語学関連科目（中国語）

語学関連科目については、本学の学びの体系における主専攻の 1 つであり、多文化共生を生き抜く上で重要なスキルであるコミュニケーション力の養成や異文化理解の知見の獲得を目指している。その一環として、入門・初級中国語諸科目における基礎的な言語の運用能力の修得は不可欠である。学生にはその必要性について説明し、毎回の講義においては、学生の取りこぼしがないよう、單元ごとの確認テストを実施し、学生自身に学びの確認をさせるとともに、教員も学生の修得度に合わせて授業を展開す

るように努めている。また、語学ラウンジへの出席や必修科目の確実な修得を促した。あわせて、HSKの受験を積極的に推進した。

一方、中国人学生との相互学修科目「e-Tandem Learning 中国語」では、ポストコロナ禍においても、引き続き留学に代替する教育活動となるよう、毎回のアンケート調査などを踏まえ授業方法の改善を行っている（学会、論文で発表）。具体的な改善点としては、日中両国の学生が円滑、かつ継続的にオンライン学修が実施できるように、双方が希望する学修テーマの選定や合同説明会の開催および事前のパートナーとの打ち合わせの実施など、互恵学修開始までの準備を充実させ、開始後の早い段階でセッションの参観を教員が行い、フィードバックによる改善を促すなどのサポートをしている。

「語学研修（中国語）」は、今年度から研修機関が設定した 3 週間プログラムへの参加に変更した。現地研修は、世界各国の様々な国籍、年齢の参加者とレベルに応じて同じクラスで実施された。

(2) 教養関連科目

「異文化接触論」は、本学のカリキュラムにおいて「多文化共生を探究する分野」に属する科目であり、学生には中国の庶民文化を題材として、具体的に異文化接触と文化変容の事例を示しつつ講じている。国際間の交流や他文化の理解においては、歴史に関する知見の獲得は不可欠であるとする。そこで、講義中に学生自身に調査、発表させ、それを踏まえて、社会や庶民文化の変容などについて講じるようにし、理解を促すようにしている。また、その一環としてワークショップ（版画の摺り）も取り入れられている。

同分野に属する科目「e-Global Communication」は、オンラインを活用した複数の国家・地域による国際交流学修プログラムであり、海外の日本語学修者との協同学修を通して、「母語話者として他言語修得の困難を知り、多文化共生社会におけるコミュニケーション力や視点を養う」ことを趣旨としている。3 回目となる今回は、中国 3 名、台中 2 名に加え、台北 2 名および韓国 1 名の大学生が参加し、本学の学生とペアとなり学修活動を活発に展開した。プログラム実施までに、各大学の担当教員との綿密な打ち合わせを行い、活動内容を国際間に齟齬のないように修正しながら準備を整えた。一方、海外の参加学生および本学の学生への事前研修も、円滑な国際交流学修プログラムの成就に当たり周到に実施した。プログラム開催中は、教員間の連携と学生同士のセッションのフォローなどを通じて効果的な学修活動が展開できるように努めた。海外の学生による日本語プレゼンテーション大会の実施を課し、共通目標を達成するための協同学修を通して、異文化間のコミュニケーションにおける他者との関わりについて実践的に学ぶことができるようにした。一方、本学の学生には、同大会においてパートナーの母語で、パートナーの紹介や学修活動に関するスピーチを実施させ、パートナーからスピーチの指導を受けることを通して、言語学修に対する学修欲求にも応じるようにした。

「ことばと人文学」では、学生に教員の研究領域における「ことば」の意義が明快に理解されるよう、具体的事例を示し丁寧に解説し、よりシンプルな内容となるよう情報を整理した。また、活発な意見交換ができるように、グループ討議についての感想を課題の 1 つとした。2026 年度は、内容を一新した。課題も、専攻コースや講義内容に対する興味関心に関わらず取り組むことのできる内容とし、Google forms による記述式回答を利用して提出させるようにした。

(3) ゼミナール

「アカデミアゼミ」では、教員とのディスカッションや他学生の調査報告を聴くことを通して学生に研究テーマを探索させ、多角的なものごとの見方について理解を促した。また調査技術、執筆技術、プ

プレゼンテーション技術などを段階を踏んで指導するようにしている。

(4) 大学院関連諸科目

院生が自立的に、計画的に研究活動を進めるうえで必要なスキルを養成することを目指し、課題に対する調査を毎週プレゼンテーションさせている。また、修士論文の執筆を成就させるために、研究の進展と執筆を促し、確実に記述までに完成させるように指導した。

4. 教育活動の成果・評価と改善方策

(1) 教育活動の成果

2021 年度より開講したオンラインを活用した中国の大学との交流学修である「e-Tandem Learning 中国語A」「同B」は、每期、学生の学修成果報告書および学生からの記名式アンケートを分析し、より円滑に国際間の学修活動が展開できるように努めてきた。3 期にわたる検討について（2021 年度春期～2022 年度春期）学会で発表し（中国語教育学会第20 回大会）、さらにその検討を踏まえて実施した4 期以降の再改善を踏まえた成果を、「ポストコロナ時代のオンラインを活用したグローバル教育—科目「e-Tandem Learning 中国語」における授業改善を通して—」（『教育研究』第13 号、1- 12p、愛知文教大学、2023 年3 月）として公刊した。こうした継続的な改善によって、履修生の授業満足度は常に高く維持され、また、彼らは異文化交流への理解や、語学修得に対する意欲の向上を学修成果としてあげている。

また、2023年度より開講し3回目となった国際交流学修プログラム（「e-Global Communication」）では、日本語によるプレゼンテーション大会を通じて、海外の日本語学修者と協同で共通の目標に向かって学修活動を進展させる中で、異文化に対する理解や配慮、および異文化間コミュニケーションの実践的な学びが得られたことが窺えた。

「語学研修」は、従来の本学学生用のプログラムではなく、研修機関の既存のプログラムを利用したため、各国からの多様な世代の学生と共にプレイスメントテストによって編成されたクラスで研修が実施された。当該クラスでは中国語を使用することは言うまでもないが、英語も多用され、改めて英中両言語の修得の必要性が実感されたことが報告書に記されていた。また、韓国語も使えたとする記述もあり、多言語修得へのモチベーション向上にも寄与していることがうかがえた。

(2) 評価と改善方策

入門・初級中国語諸科目では、2024 年度から、確認テストを成績評価の一部とすることで、積極的な学修への取り組みを促したが、事前に学修せずにテストに臨む学生も散見された。2025年度は、当初から確認テストの意義の理解を促し、フィードバックを充実させるように努めており、平均点が格段に上昇している。

「語学研修」は、研修機関の設定する3週間プログラムに変更したことで、学生の研修中の学修モチベーションや異文化交流に対する理解が大いに向上したことが、報告書の記述から窺え、今後もこれを継続していくことが最善であると考えている。履修者4名中2名が長期留学に結びついており、短期留学が学修モチベーションの向上に効果的に機能していることがうかがえる。

インターネットを活用したリアルタイムの国際交流学修プログラム「e-Global Communication」「e-Tandem Learning中国語」は、周到な準備と学修内容およびフォローに努め、いずれも履修生から高

い学修満足度を得ており、教育的な効果や手ごたえも十分に感じている。本学修活動の修了証は、就職活動におけるアピールにも生かされており、この学修プログラムの優位性を裏付けるものと承知しており、継続的に実施していきたいと考えている。

「アカデミアゼミ」は、学生が自律的に研究を展開させるよう導いていることは、彼らの多彩な研究テーマによって傍証されると自己評価している。しかしながら、執筆技術については問題が少なくなく、さらにきめ細かく具体的な事例を示しながら指導していく必要があると考えている。

大学院については、修士論文の執筆時間が十分に確保できるように、毎講義で進捗状況を確認し、問題点を議論して、円滑な執筆を促したが、執筆を完了したものの不十分なものとなり、再提出となった。最終的には、本学における修士論文の水準を十分に満たすものと評価され、結果として適切に指導できたと考えている。

5. 今後の目標

教育の理念に基づき、多文化共生社会において活躍できる人材の育成を期す。いずれの授業においても、学生に積極的な参加を促すべく、講義内における調査や発言、講義終了後に課題を課すなどし、より自立的、実践的な学修を促していきたい。あわせてこれまで通り学生へのフィードバックを的確に実施し、学修意欲の維持・向上に努めたい。とくに、中国語運用能力の獲得については、積極的に学修に励む学生もいるが、言語学修に対する意欲の低い学生も一定数あり、さらにきめ細かい対応をしていく必要があると考えている。言語ラウンジを大いに活用し、より活きた中国語の修得も促していきたい。あわせて、学生が異文化理解や歴史、文化に関する知見を深化させられるよう教育活動に努めたい。